

「いろは作者註文」の異本

西野 春雄

大永四年(一五二四)の奥書のある観世系の作者付『能本作者註文』には、その影響下に編まれた作者付が数種存在するが、そのなかでも「いろは作者註文」は、「歌謡作者考」の祖本と目されているもので、「能本作者註文」とは極めて近い異本関係にある。

この「いろは作者註文」は田中允氏によって紹介され(『歌謡作者考再論』詞語と国文学、のちに国語国文学研究史大成『謡曲狂言』昭和36年・三省堂刊)に翻印された。同書は、いろは別に能の曲名を分類した名寄せに、(『観世小次郎註文や(『観世弥次郎註文』などを参考に)して、それらの曲の作者名を注したもので、全部で七五五番の曲名を掲げる(相生と高砂、唐船と祖慶官人などのように異名同曲も掲げているので、実数は若干少ないはず)。そのいろは別の名寄せの内容が近世の名寄せ類には見えない古曲を多く含んでいることから、室町末期の成立と考えられ、しかも文祿三年(一五九四)成立の『豊公謡曲』を含まないこと、天正六年(一五七八)の事件を扱った「臼杵」

という曲が見えることなどから、その最終固定時期は、天正六年から文祿三年までの間と推測されている。

さて、この書は鴻山文庫に江戸中期の写本が伝えられるのみで、異本は報告されていない。鴻山文庫本は始めに(筆次抄(題記なし)、次に作者付、最後に笛の譜や鼓の手付を合写して一冊とし、同装の他の能楽関係伝書四冊(『秘密花伝抄』、『小鼓秘伝書』、『謡第一工夫集上』ほか)と一群の書である。作者付には書名はなく、「いろは作者註文」という書名は田中氏が『謡曲狂言』に翻刻の際に命名されたものである。

ところが、最近、珍しい異本の存在を知った。上野学園大学日本音楽資料室所蔵の、『謡花伝抄上下』と題する袋綴青表紙の写本(一三二×一六四mm)一冊がそれである。全一〇九丁。鴻山文庫本と同様、数種の能楽伝書を合写し転写を重ねた本であるが、一〇八丁の表に、右一冊者観世家秘伝聞書之集也 予師綿屋

彦兵衛文昭相伝取持之 某依稽古執心免許
可写之旨書写令遂校合畢
貞享四年丁巳歲端午吉旦 坂井忠福
とあり、そのあとに、

此書獵之難就有之写改者 行年八十一
度会並彦

寛延三庚午年五月廿四日染筆六月三日終謡
稽古之砌秦忠福其後村主美忠文改度会並彦
とある。また一〇八丁の裏には、

右観世家伝之一冊予師松木采女度会並彦ヨ
リ以手形相伝之任者也

于時寛延三庚午年十二月日 正下 荒木田武精
の奥書がある。さらに一〇九丁の表に、

私曰此上下卷花伝抄ト云事不心也 其故ハ
此卷之間ニ花伝抄ニ曰：ト云事所々有之
左衛門大夫観世秦元清書之ト云条々而已花
伝抄ト云成ラン 其余ハ附増者ニ哉
寛延三庚午年十一月廿四日染筆十二月廿四日
写終 高 丹宮 武精

とあって、種々転写を重ねつつ最終的には荒木田武精が寛延三年(一七五〇)の十一月から約一ヶ月かかって書写した本であることが推測される。

合写されている伝書は、上巻が(『風姿花伝』(いわゆる四卷本系) (『観世小次郎元頼伝書』) (元安本五音之次第) など、下巻が(『塵芥抄』) (『謡作者之事』(86ウ) (100ウ) (鼓の手付・笛の譜) などである。右の謡作者之事が「いろは作

者註文」なのである。しかも、作者付の前後に合写された伝書の内容が鴻山文庫本と同じであり、両者は同系統の書と思われる。

荒木田武精が疑問を抱いた花伝抄は「風姿花伝」の第一・第二と第四までで、第二は鬼の途中で終わり、そのあとに傍線の奥書があるが、第四のあとに、

此本書等観世阿弥自筆本也 右此本磯田所持候ヲ御写候由之書付有之候 借用申写申候也

天和二壬戌年六月吉日 文昭

の奥書がある。これは鴻山文庫本と一群の書「秘蜜花伝抄」(四卷本系)にもあり(ただし文昭の名はない)内容も同じだ。しかも「下村宗巴入道判」の奥書のある「観世小次郎元頼伝書」が「秘蜜花伝抄」にも収載されている。また「小鼓秘伝之書」には書写に関連して度会正冬の名も見え、結論のみをいえば、合写の形態・内容など、新出本は鴻山文庫本と同系統と考えられるのである。

つぎに問題の作者付について新出本の内容を紹介しよう。まず冒頭に「謡作者之事」という題記があり、曲目を列挙したあと「謡番数作者」とあること、これらは鴻山文庫本にはない。また一行に三曲ずつ、片面十行に書き、鴻山文庫本よりは書式に混乱がなく、曲

名表記は仮名書きを基本としつつも、鴻山文庫本より漢字表記がやや多い。

相互に曲目の出入りがあり、鴻山文庫本の欠落を補うこともできる。それは次の三曲で、「つ」の項「土蜘蛛」のあと「繩の将監」修次信世阿 つね盛注在之の一行が入るのが原形らしい。したがって番数も七五八番となる。「繩の将監」がここに来るのは不審。「繩」を「綱」と誤ったのかもしれない。「繩の将監」とは珍しい曲名だが、これは「那波の」が正しく上野の国の那波の将監成澄が討たれた話に取材した、長俊作の「親任」の別名であろう。

逆に新出本は「むら山観小」むかへ「宗定」の三曲を落している。「西行物狂」を「西行桜」と誤り「西行桜」を重出させたり、「さんしょう」と「さる」を続けて一曲扱いするなど、注意を要する点もあるが、両者をつき合せることによって、ある程度原形に近づけることは可能であろう。たとえば、細い例になるが、次の十三曲の肩書(脇・修・女)は鴻山文庫本に落ちているものである。

脇老松世阿 女葛城世阿 修清経世阿 脇こもり世阿 脇西王母 脇泰山府君 脇玉井観小 脇難波世阿 女軒端世阿 脇伏見世阿 女仏の原世阿 脇松の尾世阿 女松浦かゞみ世阿

その他多くの問題を含む新資料だが、詳細は別稿に譲る。(にしの・はるお 法政大学助教授)